



他科の先生に  
知って欲しい

# 豆知識・・・皮膚科編⑦

## ざ瘡、酒さ、酒さ様皮膚炎：似た者同士の見分け方

岡山県医師会理事 岩月啓氏  
岡山大学病院皮膚科

一見、「ざ瘡」のように見える皮疹には、いくつかの鑑別診断があります。

1. 尋常性ざ瘡 (acne vulgaris)：いわゆる「にきび」は、初期病変として面皰 (comedo) と呼ばれる毛孔の閉塞を伴います。面皰には、白色一皮膚色の毛孔性丘疹 (white head) と、毛孔に黒い角栓を認めるタイプ (black head) があります。面皰形成ゆえに、毛包内に皮脂と角質が溜まり、嫌気性状態になるために、ニキビ菌 (*P. acnes*) の発育が起こります。脂質が分解されると、遊離脂肪酸が放出され、組織に炎症を起こし、ニキビ菌由来の菌体成分が好中球を引き寄せ、毛包中心の炎症を起こし、激しくなると膿疱形成します。面皰に混在して、紅色丘疹や、膿疱などが見られるのが特徴です。

ざ瘡と診断がつけば、上記の病態を考えつつ、治療を考えればよい結果が得られるでしょう。つまり、面皰形成を抑える、ニキビ菌の発育を止める、脂質分解のリパーゼ作用を抑えるのが基本です。詳細は、日本皮膚科学会のざ瘡診療ガイドラインをご参照ください ([https://www.dermatol.or.jp/uploads/uploads/files/acne\\_guideline2017.pdf](https://www.dermatol.or.jp/uploads/uploads/files/acne_guideline2017.pdf))。

尋常性ざ瘡に類似の皮疹は、Cushing病などの内分泌疾患、ホルモン剤、ハロゲン化剤、分子標的薬、ダイオキシンや機械油などで生じます。集簇性ざ瘡や電撃型ざ瘡は、多関節炎を合併したり、炎症性腸炎、壊疽性膿皮症や大動脈炎などを基礎疾患として有することがあり、全身性疾患として治療する必要があります。

2. 酒さ (rosacea) と酒さ様皮膚炎 (rosacea-like dermatitis)

酒さは、尋常性ざ瘡と同様の毛孔一致性紅色丘疹と膿疱を生じることがありますが、面皰形成は目立たず、頬部を中心に毛細血管拡張の結果として赤ら顔が見られます。白人では赤ら顔が顕著にみられることが多く、酒さの頻度も高いです。酒さの病態については、抗菌ペプチドであるカセリシジンの代謝産物が関与しているとの報告があります。

メトロニダゾール、ドキシサイクリンやその他の抗菌薬、毛包虫が増加している症例ではイベルメクチン、毛細血管拡張についてはレーザー治療が試みられていますが、明らかなエビデンスに基づく、推奨度の高い治療法はありません。

酒さと混同される疾患が、酒さ様皮膚炎です。副腎皮質ステロイド外用薬の長期連用によって、毛孔一致性紅色丘疹と膿疱に加えて、毛細血管拡張をきたします。口囲に限局する場合に、口囲皮膚炎と呼ばれます。副腎皮質ステロイド外用薬の中止が治療の原則ですが、急に中止することで激しいwithdrawal現象を起こすことがあります。その治療にはひと工夫が必要ですので、皮膚科専門医の受診を勧めてください。